

強者の戦略

世界史〔京都大学 2022年 第1問 より〕
挑戦してみてくださいか。
ではあらためて問題を確認します。

マレー半島南西部に成立したマラッカ王国は15世紀に入ると国際交易の中心地として成長し、東南アジアにおける最大の貿易拠点となった。15世紀から16世紀初頭までのこの王国の歴史について、外部勢力との政治的・経済的関係および周辺地域のイスラーム化に与えた影響に言及しつつ、300字以内で説明せよ。解答は所定の解答欄に記入せよ。句読点も字数に含めよ。



研伸館のテキスト「体系化する世界史」より

京大で東南アジアをテーマにした300字の論述はこの年が初出と言っていると思います。かなり驚いた受験生が多かったのではないかと思います。京大は過去に出題した同じテーマを出してくることはほとんどありません(時代が近くてもテーマをずらしてきます)。そのために幅広く知識を持ってあらゆる地域・時代に対応できるようにしておかないといけません。これまで出題されていなかったからといってまったく触れていなければ、受験生は大変な目にあ

ってしまいます。京大志望の皆さんは幅広い学習を心がけてくださいね。

さて、マラッカってどこか、そこから確認しないといけません。地理が苦手な人はしっかり場所を見ておきましょう。現在はムラカと書かれることが多いですね。ムラカは州の名前でありその州都の名前でもあります(ここでは世界史の教科書類に合わせてマラッカ、マラッカ王国の表記を進めます)。マレー半島の南西岸にあり、現在でも東南アジアの交通の要衝であるマラッカ海峡に面しています。海峡の向かいはスマトラ島です。

かつてここに東南アジア最初のイスラーム教国であるマラッカ王国が存在していました。

<問われていることを確認>

「15世紀から16世紀初頭までのこの王国の歴史」
「外部勢力との政治的・経済的関係および周辺地域のイスラーム化に与えた影響に言及しつつ」

時期ははっきりしていますね。15世紀ということはマラッカ王国がすでに成立しており、16世紀初頭ということはマラッカ王国が滅びたところまでとなります。

この地は様々な勢力が訪れます。北のタイには大きな王朝があり、この地を狙ってきているのはよく知っていると思います。また16世紀はポルトガルが香辛料を求めて東南アジアを訪れ、マラッカ王国を滅ぼしてマラッカ海峡を支配します。では一つ一つ確認していきます。

<時代順に確認>

○明と朝貢関係に

マラッカ(ムラカ)王国は14世紀末に成立しました(1402年とする説もあります。用語集などでは14世紀末の説をとっています)。14世紀末から15世紀にかけて、広大な領域をもっていたマジャパヒト王国で内戦がおこり、スマトラ南部のシュリーヴィジャヤ

強者の戦略

の王子がマレー半島に逃れてきたのが起源だとされます。

交通の要衝であるこの地域には、様々な地域から商人が集まり、最初は貧しい漁村の港町と言っているくらい小さかったマラッカ王国は成長を始めます。その成長を聞き、北にあるタイのアユタヤ朝はこの地を狙い、従属させました。

15世紀になると、明の鄭和の南海遠征の拠点となります。3代目永楽帝の時代から、海禁策は継続するものの、鄭和を各地へ送り、朝貢を促進します。鄭和は7回遠征しますが、1回の遠征で2万人を超える大船団であったとも言われています。西洋の大航海時代が本格的に始まる前にこの大船団で、鄭和の部下はアフリカ東岸のマリンディまで行ったり、アラビア半島のメッカまで行くのですから、すさまじく強かったと思われれます。遠征と言いつつ、実際は大きな戦闘はあまりなかったようです。鄭和は雲南出身のイスラーム教徒の宦官であり、イスラーム商人が海の道で力を握っていたこともあって、遠征はうまくいきやすかったのではと思われれます。

明がこの地に入ると、アユタヤ朝は手が出せなくなります。マラッカ王国はタイのアユタヤ朝からの従属を脱し、明と朝貢関係を結び、以後インド洋と南シナ海を結ぶ物資の集散地となります。中国からの絹や陶磁器、東南アジアの香辛料、インドの綿布などが取引され、ジャワのマジャパヒト王国に替わって東南アジア最大の貿易の拠点になりました。

なお、今回の問題とは関係ない内容ですが、東シナ海と南シナ海を繋ぐ中継貿易の拠点として、海上交易で栄えたところがあります。どこか分かりますか？それは15世紀に中山王によって統一された琉球です。琉球や台湾も確認しておきたいですね。ちなみにマラッカと琉球は交流があったそうです。

15世紀の半ばごろになると、明が対外活動を小さくさせます。朝貢貿易を促進したものの、明にとって返礼はかなりの負担になります。明は緊縮財政へ向かい、対外活動を縮小させていきます。マラッカを

狙っていたアユタヤ朝は再び支配を試みようとしません。

○イスラーム教国へ

15世紀前半、マラッカ国王がイスラームに改宗していました。鄭和の遠征以降、交易が活発になると、イスラーム商人との交渉が活発になり、イスラームが急速に広がりました。

明の対外活動が縮小すると、西方イスラームの商業世界との結びつきを一層強化し、タイの進出を阻もうとします。

こうした背景からイスラームがマラッカからの交易ルートに沿って、周辺の島嶼部に広まっていきます。ジャワ島やスマトラ島、そして一部はフィリピンなどにも広がります。フィリピンというと意外かもしれませんが、マゼランと戦った王ラプラブはイスラーム教徒だったといわれています。

こうしてマラッカは、インド洋のムスリム商人と東・南シナ海の中国人商人のネットワークを結びつける場所となり、東南アジアのイスラーム布教の拠点となるわけです。東西貿易の中心的港市として繁栄しました。

ところが、1498年にヴァスコ＝ダ＝ガマがインドのカリカットに到着して以降、ポルトガルのアジア進出が始まります。1510年のインドのゴアをアルブケルケ(インド総督：インド副王)という人物が占領し、香辛料を求めて東南アジアへの進出を推進します。1511年にはアルブケルケによってマラッカ王国は滅亡し、マラッカ海峡はポルトガルによって支配されました。

マラッカ王国滅亡後、マラッカ王の子がジョホールにジョホール王国を建設しました。

ポルトガルがマラッカ王国を滅ぼし、海峡の通行を管理しようとし、イスラーム商人を弾圧しようとした。すると、交易ルートが、スマトラ島の西海岸を南下し、スンダ海峡を通るものに替わっていききました。ジャワ島にはバンテン王国やマタラム王

強者の戦略

国が成立しますが、ジャワ島西部のバンテン王国は香辛料の交易で有名ですね。

では解答例です。他にもこれはどう？という内容もあるかと思います。

以下の解答例を参考に、教科書類をみて、確認してみてください。

【解答例】

マラッカ王国は15世紀に入り明の鄭和の南海遠征の拠点となりその保護によりタイのアユタヤ朝からの従属を脱し、明と朝貢関係を結んだ。以後インド洋と南シナ海を結ぶ物資の集散地として繁栄し、東南アジア最大の交易拠点となって中国の絹や陶磁器、東南アジアの香辛料、インドの綿布などを取引した。明が対外活動を縮小させるとタイが支配を試みたが、国王がイスラームに改宗して西方イスラーム商業世界との結びつきを強化し、進出を阻止した。これを機にイスラームがマラッカを中心とする交易ルートに沿って周辺の島嶼部に広まりジャワ島やスマトラ島、フィリピンへ広がった。16世紀初頭、香辛料貿易への参入を目指すポルトガルに占領された。
(297字)

今回の問題は地図を思い浮かべながらやっついていかないといけないですね。丁寧に復習してくださいね。

世界史 北林